

昭和の南海地震体験談

氏名: 出口 繁一(でぐち しげかず)

生年月日: 昭和5年

地震を体験した場所: 下津町塩津・自宅寝室

当時の家族状況: 父、母、祖父(父方)、
祖父(母方)、祖母、弟、妹



1) 地震発生時の状況

当時16歳で、父と一緒に漁師をしていた。漁で沖に行き、船が着いて陸へ上がって、夜中に家に戻る、というサイクルの生活だった。地震の日も父と漁に出かけ夜中に帰って、自宅寝室で仮眠を取っていた。突然大きな揺れが始まり、目を覚ました。

2) 津波襲来時の状況

地震の揺れが収まり、自宅前の道路に出た。その道路のすぐ向こうが海だったからだ。見ると潮が引いている。小学校4年生の時に習った「稲むらの火」を思い出しながら見ていたら、3m程度潮が引いたので、これは大きな津波が来ると思った。まだ夜も明けておらず、薄暗い中だったが、潮は残っていなかった。それが20分も経たないうちに一段高く潮が来た。小さな第1波が引くまでに、空き缶を叩いて「津波が来るぞ！出て来い！」と近所の人を起こしてまわり、家族を山に避難させた。祖父の1人は足が不自由だった為、背負って山の広場まで行った。安全な場所に残し、自宅に戻った。戸を開けたままにしてきたので、潮が入らないように閉めたかったからだ。しかし、ちょうど第2波が来たところで背の高さまで潮が来た。潮が引いてから20～25分程だったと思う。再び潮が引き始めた時、父に「船に乗れ！」と言われ乗船したら、持っていた出刃で陸に繋いでいたロープを切られた。地震や津波の時は、沖に出ると無風で非常に静かだと昔から教えられていた。沖へ船を漕いで行き、静かな海上で待機していた。第3波が一番大きくて、後は徐々に小さくなっていった。

3) 家族の行動・被害

早めの避難だったので、全員無事だった。自宅は1階部分が天井まで濡れた跡があった。持ち船も沖に避難させたので無事だった。地震の被害は無かった。

4) 集落・周囲の被害

お椀形の地形をしているので、少し山側に上れば高台になる為、幸い人的被害は無かった。海に近い家屋は1階部分が浸水した。船を持っている人は乗船し、沖に出て無事だった。

5) 地震・津波後の生活

水が早く引いたので、すぐ片付けに取りかかったが、水道が無い頃だったので、なかなか思うようにはかどらなかった。2階部分が浸かっていないので、そこで生活をした。井戸に潮が入り使えなくなったので、山手の被災しなかった井戸を使わせてもらった。食料もダメになったが、遠くの親戚がお米を持って来てくれたのは嬉しかった。船が無事だったので、翌日から漁を再開できたが、元の生活に戻るまで時間がかかったと思う。

6) 次の災害への備え

被災した土地よりも地盤が高い土地に、地上げをして自宅を建て、引っ越した。避難訓練に参加し、手順や避難場所の確認などの練習をしている。当時より埋め立てがすすみ、防波堤ができたので安心しているが、細い路地や坂道が多いので、避難経路が不安である。持ち出し袋などは特に用意していない。毎年、小学校や中学校から依頼されて、子供達に体験談を語っている。

